

人を育てる「福原塾」



黒川 清 先生

東京大学名誉教授／政策研究大学院大学アカデミックフェロー

特定非営利活動法人 日本医療政策機構 代表理事

医学研究の在り方は、時代と共に変化する。特にこの 20 年の「グローバル世界」となってからの変化は急激である。20 年ほど前は「From Bench to Bedside」的なテーマが多くの学会でも見られた。医学の研究は基礎研究も大事だが、臨床研究も大事だ。

日本の医学分野では、School of Public Health 大学院の意義は、英米のように認識されていなかった。15 年ほど前、大学設置審議会で医学部教授が「医師がそのような教育を受ける必要があるのか？」と質問したことを思い出す。

昨今のグローバル世界で、英米の「MPH」は高い評価と価値を生みだしている。職種によっての違いはあるものの、グローバルキャリアを求める医師にとっては特に価値が高い。日本では数多くの厚生労働省の医系技官が、国民のお金で早くからこのキャリアを積んではいるものの、それを十分には活かせていない。行政組織が変われないからである。

企業が支援する DOPPS という欧米日の透析患者データを比較する大規模な臨床研究がこの 20 年ほど行われている。今で言われる「Big Data」の始まりともいえる観察研究である。データの集積・解析から新しい「問い」が生まれる。その比較分析の論文が数多く英文でも報告され、日本の透析医療の質の高いことが「科学的データ」によって世界に広がった。この比較研究のプロセスで、多くの新しい能力を持つ医師が生まれてきた。間違いなく「腎臓・透析医のための臨床研究デザイン塾」のおかげだ。つまり「福原塾」を経験、体験して、新しい人材が育ってきているのだ。

福原さんは京都大学へ移る。次第に多くの若い医師が「福原塾」で「MPH 的」研究手法を身に付けてきた。優れた指導者がいて初めて、このグローバル時代に適した優秀な「MPH」が、何人もでてきた。しかし、大学医学部、医学界などでの認知は、英米に比べればはるかに低い。医学界も、医学部も、変わらないのである。

この 10 年、厚生労働省の研究にも変化がみられ始めた。「戦略研究」というカテゴリーの新しい形の研究である。政策に反映させるための「臨床実地テスト」ともいえる研究手法で、主任研究者といえども「厚生科学課」の枠組みで考えられた「研究を遂行する」責任者となる新しいタイプの研究である。従来では霞が関的に「事業」として実施されてきたタイプのものも多い。このような手法は大学ではなじみがなかったので、大分苦労している。この新しい形の霞が関発の研究でも、何人もの「福原塾」の修了生、日本型「MPH」の活躍が広がり、目立つようになってきたのである。

本当に力量のある人材育成には、教育ばかりではなく、実際のいろいろな場面での研修と、活躍の場が必要なのだ。そして、そのような人たちの活躍する場ができてきているのだ。社会からの必要性がでてきているのだ。

ふさわしい能力を持った人材の育成には時間がかかるのであり、そのような人材を育成しようとする先見性のある教育者が必要なのだ。

福原さんが 10 年前にはじめた「腎臓・透析医のための臨床研究デザイン塾」は、そのような世界の流れ、社会の変化に対応する新しい医師の育成に極めて大きな役割を果たしてきた。

福原さんが京都大学へ移ってから、このような人材育成には拍車がかかった。日本の中でも、最上位にある大学で、日本の社会、大学が認める「教授」になったことも効果があっただろう。そして、それまでそのような時代の要請に合う人材を作る、名実ともに実力ある大学もなかったこともあったであろう。

しかし、福原さんの実力と「こころ-心」がなければ、そのような人材は育たない。本人が「範を示して」初めて、人材の育成ができるのである。そのような人材は、自分の受けた教育を「脳ばかり」でなく、「こころ-心」で感じ取り、「お礼の気持ち」を、無意識のうちに「次の世代へ」渡していく。福原さん自身にも、その「こころ-心」が生まれる背景があったのだ。世代間を超えた好循環が生まれる。これが人を育てる、つまり教育の根源的な理念からの自発的な行動なのだ。

「福原塾」はそのような場所であったのだ。これを起点に、将来の人材も育てていこう。人を育てるのはとても時間のかかることなのだ。